

虹

日本の端で作る本



本に囲まれる西さん

189 長崎にたどり着いた編集者

かつて家具店のショールームだった空間を埋め尽くしているのは本だ。テーブルや椅子ではない。壁も、床も、ノンフィクションや小説、学術書がびっしりと並ぶ。数千冊の蔵書の持ち主は高岡市出身の西浩孝さん(42)である。編集者という仕事柄か、本は細胞分裂するように増えていく。

窓の外には坂道と住宅街が見える。長崎は坂が多い。東京から移り住んで8年。たった1人で「編集室 水平線」を営み、少部数ながら硬派な本を刊行している。

2025年は終戦から80年を迎える。原爆を落とされた長崎では、とりわけ重い意味を持つ。この節目を前にした2024年12月、西さんは『未来からの遺言』を出版した。絶版だったものを復刊した。被爆者の声を記録し続け、その足跡を凝縮した一冊だ。著者は長崎放送でラジオ記者だった伊藤明彦さん。2009年に72歳で死去している。

日本被団協のノーベル平和賞受賞という世界的なニュースもあり、原爆に注目が集まる時期だったが、狙っていたわけではない。「もっと早く出すつもりだったけど、目の前の仕事に追われてしまった。結果として良かったんですかね」



生まれ育った高岡の実家には本らしい本は少なかった。伏木中学校では陸上に打ち込み、家ではバラエティー番組をぼんやり眺めていた。成績は「中の上」程度。陸上部の先輩に憧れ、県内トップレベルの進学校を目指した。親にも教師にも合格を危ぶまれた。それでも、根拠のない自信はあった。

志望校に入って驚いた。中学では多様な家庭の生徒が机を並べていた。八百屋や定食屋の息子がいた。西さんの父は工場勤めだった。しかし、高校は色合いが違う。医師、弁護士、公務員、名の知れた企業の子もたちが大半だった。少し居心地が悪かった。

雑多でにぎやかな世界が、偏差値で輪切りにされて平坦になって見えた。社会への違和感が芽生えた。社会を知りたくなった。

難関の一橋大学社会学部を志望したのは、特別な思い入れがあったからではない。家計を思えば国公立しか選択肢はなかった。その中で当時、数少ない「社会」が付く学部だった。社会学がどんな学問かも知らなかった。それでも合格した。

大学では貪るように本を読んだ。安くはない学費を出してもらっているのだから、

勉強するのは当然だった。必修科目で紹介された本が面白かった。鎌田慧さんの『自動車絶望工場』や、辺見庸さんの『もの食う人びと』などのように、社会や政治の構造を深く掘り下げ、鋭く批判する本だった。本に導かれるように学生生活を送り、言葉に関わる仕事を志した。しかし、当時は就職氷河期だった。新聞社は全国紙も地方紙も落とされた。出版社も門戸は狭かった。そんな中、縁があったのが社会派の出版社として知られる大月書店だった。

最初は下働きだった。「1人前になるには5年必要」と言われた。「そんなにかかるとか」とがく然としつつ、企画を出した。読書の醍醐味を教えてくれた鎌田さんや、辺見さんといった文学性と社会性を併せ持つ著者たちの本を手がけた。サントリー学芸賞のような大きな賞に輝いた書籍も作った。5年たっても、10年たっても本作りは難しく、面白い仕事だった。

最初は下働きだった。「1人前になるには5年必要」と言われた。「そんなにかかるとか」とがく然としつつ、企画を出した。読書の醍醐味を教えてくれた鎌田さんや、辺見さんといった文学性と社会性を併せ持つ著者たちの本を手がけた。サントリー学芸賞のような大きな賞に輝いた書籍も作った。5年たっても、10年たっても本作りは難しく、面白い仕事だった。



「あたたまる春」西治子

34歳で転職が訪れた。研究者の妻が長崎大学から内定をもらった。念願の正規職を得た妻の将来を応援したかった。一方で、西さんは会社を移ろうとしていた。出版不況で自分が作りたい重厚な本は出づらくなっていた。よそで編集者としての腕を試してみたい気持ちがあった。しかし、出版社も、本を書きそうな人物も東京に集中する。長崎は想定外だった。決め手となったのは子どもだ。妻は身ごもっていた。2人で成長を見守り、育てたい。別居は選択肢からはずれた。東京を諦め、家族で長崎に行くことが最良の選択肢だと自分を納得させた。

すんなりと割り切れたわけではなかった。真っすぐに帰らず、やけ酒を飲んだこともあった。男性の友人たちは「もったい

ない」と言い、女性の友人たちは「偉い」と褒める。長崎に行くことは正解なのか。迷いと未練は残っていた。



長崎では当初、東京の知人から仕事もらい、フリーランスとしてやっていくつもりだった。大きく稼げるわけではないが、引き合いはそれなりにあった。しかし、それは他者の意図や判断に沿う仕事だった。自分で企画を立て「これは価値がある」と信じるものを世に出したくなった。

最初は自費出版でもすればいいと考えた。ただ、プロの編集者としては広く読者に届けたい。調べていくうちに、書籍を識別するISBNコードは個人でも取得できると分かった。コードさえあれば、インターネット書店でも流通させられる。

「編集室 水平線」という屋号の由来は、同郷の作家、堀田善衛さんだ。伏木の廻船問屋に生まれた堀田さんは、伏木中学校の

歌を作词していた。

「さあ船出しようエンジンかけて／広い世界で働こう／広い世界を知り抜こう」

小学校や高校の校歌は覚えていないが、社会人になっても、この歌詞とメロディーはそらんじている。歌詞と共に、学校の記念施設に残る堀田さん直筆の色紙を目に焼き付けていた。「水平線を見て育った者は、真直ぐ前を見て行くのだ」。いつしか自分を支えてくれる言葉になっていた。力強い一言からは故郷の雨晴海岸が目に見え、物心ついてからずっと親しんできた風景。堀田さんもきっと同じ景色を見ていた。

水平線の最初の仕事は、大月書店時代からの宿題だった。ウェブサイト用に担当していた連載を単行本にまとめたかった。内

容はハンセン病療養所の入所者たちと詩人との交流を描いたものだ。

決して売れ筋のテーマではない。会社員時代にも企画は通らなかった。しかし、西さんは世に送り出す価値を信じた。『来者の群像』と題された本は、高知出版学術賞特別賞を受けた。新聞の書評でも、SNSでも話題になり、4刷を重ねた。著者の国立ハンセン病資料館学芸員の木村哲也さんは言う。「西さんは一見おとなしい。でも突っ走る。その熱にほだされて、いい本が生まれる」



被爆者に迫った『未来からの遺言』との出会いは偶然だ。古書店の郷土本コーナーでなんとなく手に取った。500円だった。読み進めるうちに、被爆者への取材と考察の深さに圧倒された。著者である伊藤さんの生き方に感動した。8年間で全国の被爆者2千人を重いレコーダーを持って訪ね、そのうち千人の声を収録した。使命と感じた取材のために会社を辞め、テープ代は早朝と深夜のパート労働で稼いでいたという。伊藤さんの集めた声は「人類の遺産」だと思った。

復刊する価値を確信し、関係者に連絡した。伊藤さんと交流のあった人々の話を聞き、資料を収集した。『未来からの遺言』だけでなく、他の著書を含めて全6巻シリーズで刊行することにした。10年かけてやる。長崎にいないければ、作れない本だ。「編集者人生で最大の仕事になる」。戸惑いながら移り住んだ長崎は挑戦の場になった。

妻に関西の大学への移籍話があった。編集者としての環境を考えても、関西は長崎より恵まれた場所だ。しかし、西さんは断ってもらった。「意地を張っちゃいました」と笑う。「真真中にいたら端が見えない。でも、端から中央を見ると分かることがある」。今は中心地から離れた場所にいたい。東京の外には「広い世界」があるのだ。

作業机の前の棚には堀田善衛全集が並ぶ。退職金で買った高価な物だった。背表紙を見るたびに背筋が伸びる。海を思う。水平線の向こうに読者がいる。

本を作ることは投瓶通信に似ています。誰かが受け取ってくれると信じて発信する編集者の気持ちは、手紙の入った瓶を大海に向かって投げた人のお手紙です。出版不況と呼ばれる時代が続いています。全国的に書店の数が減少しています。一方で本を愛する人は確実にいます。西さんの本も時代を越えて誰かの手に届くでしょう。



「虹」第9集 販売中
「虹」を書籍化しています。最新刊の第9集『虹 海の匂いを覚えて』は2022年9月から24年5月までに掲載した20編を収めています。1,100円。問い合わせは北日本新聞社出版部、電話076(445)3352(平日午前9時～午後5時)。

心があたたまるエピソードや、この紙面についてのご意見、ご感想をお寄せください。

〒933-0911 高岡市あわら町13-50
北日本新聞社西部本社「虹」係
FAX 0766-25-7773
mail niji@kitanippon.jp
次回掲載は2月1日(土)です。

紙面提供／人と鉄のあいだに
OTANI 大谷製鉄株式会社
企画・制作／北日本新聞社
メディアビジネス局